

上
巻

ファシストたちの雪

井上光晴



井上光晴

アシストたちの雪

上
巻

集英社

ファシストたちの雪（上巻）

一九七八年五月一〇日初版印刷
一九七八年五月二五日初版発行

定 価 九八〇円

著 者 井上光晴

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一
電話 出版部（〇三）二三〇一六三六一
販売部（〇三）二三〇一六一七一

印刷所

中央精版印刷株式会社

株式会社美松堂印刷所



© M. INOUE, Printed in Japan, 1978
0893-77242-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えます。



上卷

198R年2月 5

198R年5月 161

198R年8月 279



AD・ブックデザイン・田名網敬一●イラストレーション・山下秀男●写真・高橋昇

ファシストたちの雷

上
巻

198R年
2月

1

この半年余、頻発するハイウェイ妨害事件に、珍しく大きな見出しがついたのは、捨てられた生物の死骸がこれまでのように犬猫ではなく、競走馬だったからである。ワゴンスキー。まだまだ使える五歳馬だ。去年一度だけレースの対抗だったその馬に彼は賭けたが、わかりにくい勝負をして敗れた。最終コーナーを廻ろうとする直前、無理矢理内側に突込もうとして遮られ、サンドイッチみたいな恰好になってにっちもさっちも行かなくなったのだ。

昼標^{ひるひょう}二はずらした椅子に新聞をおくと、赤葡萄酒の代りをしに席を立った。ビルの十七階にあるユーゴスラビア政府直営のレストランは、土曜と日曜日を信じられないような特別価格のバイキングにしており、料理とビールはむろんのこと、本国直送のワインも飲み放題なので、心臓さえ強ければ、幾つグラスを重ねようと自由であった。ボトルの栓を抜くウォーターの背後に、窓硝子^{ザラヌ}を通して新しく色を塗り変えた東京タワーが見える。

「もう一杯貰うよ」

「どうぞ、どうぞ」

「ワゴンスキー、捨てられてたのは、この辺じゃなかったのかい」

ブルーと茶の制服を着た長身の給仕人は一瞬怪訝^{けげん}な顔をしたが、「ああ、あれ」といった。「タワーの近くらしいですよ。何だかよくわからないけど、冷凍車で運んだのじゃないかって、みんなそうい

ってますよ」

「冷凍車。……」彼はいう。「冷凍しなくなっただけいいんじゃないのかな。どうせ捨てるんだから」
「そうですね。そいじゃトラックでもいいわけだ」給仕人はあつさりと彼の言葉を認めた。「どうして冷凍車なんているのかな」

「妙な事件ばかり起きるね、近頃。……」

「ジャイアントの木内、時々きてたんですよ。此処に」

「ジャイアントの木内。……」

「一週間ばかり前に誘拐されたピッチャーですよ」

「ああ、そういえばそういう事件がでていたな」

「プロ野球、あまり興味ないんですか」

「若い頃はよく見ていたんだがね。減多やたらとの角度から映すだろう、この頃。わずらわしくなったんだよ」彼はいう。「木内って、エースなんだだろう」

「中日専用に養成されたサウスボーなんだけど……」

話にならないと思ったのか、給仕人はボトルの口を布で拭きだした。昼標喬二はみたされたワイングラスを手にして自分のテーブルに戻りかけたが、コーヒール碗を持つ子供と危くぶつかりそうになった。年配は自分とおっつかつか。恰幅のよい亭主と若い妻。双子とも見える位に顔のよく似た小学习上級生の兄妹。隣席の家族連れは三、四カ月前にも確か見たような記憶がある。その時はまだ昼標喬二にも家族と称する妻と高校一年の娘がいた。

「あなた、札幌行きは二十日だったかしら」

「二十二日だよ。帰りは二十五日かな。もしかすると六日になるかもしれない」

「そう、だったらその間に静岡に行ってもいいわね」

「学校は」

「風邪でもひいたことにしとくわ。シイちゃんたちそれでいいんでしょ」

「よくない」

「嘘ばかり。どうせ碌な授業やってないんだから」

「学校さぼっちゃ駄目だぞ」

「ママだよ、何時も、さぼれさぼれっていうのは」

「ねえ、このコーヒー何時もと違うと思わない。あたしの口のせいかしら」

話しあえばどんな形でもできるのに、あえて離婚裁判に持込んだ綾乃の本音は何処にあるのか。別居して以後、殆ど別人のように変貌した声で示談による協議離婚の申し出を、一方的に拒否する女の屈折した憎悪は、彼の目の届かぬ曖昧な要素に左右されているようだ。

浮気ともいえぬたった一度きりの関係。それも深酔いしたあぐくに起った交渉で、実際にセックスが行われたかどうか、彼自身判然としない位の行為であった。確かに相手の女子学生とは朝までの時間を共有しているのです、その点を突かれると弁明のしようもないのだが、十七年も連れ添ってきた夫婦生活が一瞬のうちに破壊される原因としては、あまり軽すぎはしないだろうか。

奇怪な心情という点では福本和子の場合も同様である。彼が講師を勤める大学の学生には相違ないが、直接の教え子でもなし、映画サークルの顔見知りという間柄に過ぎない。その夜、新宿での出会いも偶然で、酔った勢いでただ口にしただけの言葉に乗ってきたのはむしろ彼女の方ではないのか。しかもあるることか、翌々日の午後、彼の不在を見越して妻に電話を入れ、一部始終を自ら暴露したのだ。前後の事情が被害者の告発調に染められていたのはむしろいうまでもない。

「ねえ、あんまりいうの嫌だから黙っていたけど、スープの味だって変だったわ。酸っぱいキャベツあるでしょう。あれも甘ったるいのが残ったしね」

「わるいよ、そんな」

「あら、どうして」

「きこえたらいい気持じゃないだろう、誰だって」

「きこえないわよ。でもきこえたっていいんじゃないかしら。バイキングだから何してもいいというわけじゃないんだし。はつきりいっといた方がいいかもしれないわ」

「都合があるんだよ、それぞれ」

「招待されてきたんじゃないのよ、あたしたち……」

「わかっているからさ。大きな声だすなよ」

屋標喬二は席を離れてトイレのドアを押した。元々、値段が安く、直送のワインをたらふく飲めるというだけで、スープの味をあれこれあげつらうようなレストランではないのだ。

洋式の便所で用を足した後、巻紙がないのに気付いたのは、心がそこになかったせいだろう。酔キャベツが甘ったるくなっているというのはいましかすると事実かもしれない。見廻しても余分のペーパーはなく、不測の事態に直面して彼はあわてた。

水に流すのに必要な紙を所持していないので、どう仕様もない。彼は半ば腰を浮かしてドアの裏に吊した上着のポケットに手をのばした。便器にしゃがむ時、背広の上着を脱ぐという習慣は、青年時代からのものである。

煙草の銀紙でうまくやれるかどうか。それをつかんで取出した途端、思いがけぬカードが彼の足許に落ちた。名刺をやや細目にしたクリーム色の上品なアート紙。

記憶にないカードがなぜ自分のポケットに入っているのか。昼標喬二は神経を使って銀紙で始末すると、便器に腰を掛けたまま、カードの文字を追った。

へハンブルグ・システムをご存じでしょうか。自由な場所、自由な時間、あなたは希望するセックス

・パートナーを選ぶことができます。TEL (03) 368R—880RS>

お待ちしていますの類いかと心中に呟きながら昼標喬二は立ち上がった。カードを破り捨てなかったのは、何時何処でポケットに入れられたのか、それを思い出せなかったのと、あからさまに記されたセックス・パートナーの文字にこだわったためである。トルコやラブホテルにおける風俗営業がかつての赤線を越えた実質的な内容を持つのは、周知の事実だとはいえ、表面上非合法であることに変わりはないのだ。とすると、電話番号を明記してのセックス・パートナーとは、それこそ検察のメンバーを充分挑発するに足る表現といわねばなるまい。

昼標喬二は窓際に戻ると、低い牛乳色の雲に被われたビルディングの群れをぼんやり眺めた。食欲があるのかないのか、自分でもよくわからないのだ。気のせいかシチューの匂いまでがトマト臭く感じられ、葡萄酒を口に含んでもそれは消えなかった。

グラスも持たず、ワインを注ぐ給仕人の前にまたしても立ったのは、隣席のやりとりがわずらわしかったばかりではない。ワゴンスキーが捨てられていたという高速道路に目を止めているうちに、柄にもなく不自然な度胸がついたのである。

「赤。それとも白ですか」

「随分飲むなと思うだろう」

「いえいえ、そのためのバイキングですから」

「ハンブルグ・システムって知ってるかい」

「ハンブルグ。……レストランですか」制服の青年は首をかしげた。「何でしたら尋ねてまいりましょうか」

「いやいいんだ。ちょっときいたもんだからね。六本木じゃないかと思って」

「新しい店があちこちでできていますからね」

「ワゴンスキーを冷凍車で運んだって、さっきいつてたろう。それは何。そういう事実があったの」「いえ、みんなそんなふうに話してるもんだから、そう考えただけです。実際はどうだか。……新聞でもあれこれ違うことを書いてるんじゃないですか」

「冷凍車っていわれると、そんな気にもなってくるんだな。それが……」

「すみません、どうも。……それでハンブルグってのはドイツ料理か何かの店ですか」

「いいんだよ、それは。六本木じゃないかもしれないんだ」

元の場所に戻ると、ちょうど隣席の連中が帰りかけていた。彼は新しく運んできた赤のグラスを一気に傾けたが、ふっと給仕人の視線に気付いてみるみるうちに顔をほてらせた。きつとハンブルグ・システムの意味を知っていて、からかったのだ。新しい店があちこちでできていますからね。ドイツ料理か何かの店ですか……。

星標喬二は体を半廻転させてテーブルを離れ、真直ぐクロックに足を向けた。すると長身の青年が背後から声をかけてきた。

「もうお帰りですか」

「ハンブルグ・システムっていうのは、ドイツ料理の店じゃないよ」彼はコートに腕を通しながら、むっという。

「電話番号でも調べてみましょうか」

「いい加減にしまえ」

呆氣にとられたふうを装って、腹の中では舌をだしているはずだ。何やら言葉を返した給仕人の方に振り返りもせず、昼標喬二はエレベーターのボタンを押した。この店にはもう近付くまい。

気温三・五度。銀行の時計と並んでそんな表示がでている。皮膚感覚よりも意外に高い数字なのは、今にも降りだしそうな空模様で空気が湿ってきたせいだろう。改築中のマーケットにかなりの行列ができているのは、生身の鰯でも売っているのか。

街角の電話ボックスを見ると、彼はためらわずそこに入った。〈368R—880RS〉
「もしもし、ハンブルグ・システムにおかけですね。カードをお持ちでしょうか」

保健所の受付とも思えるような、女性の幾分事務的に響く声がきこえる。

「持っていますよ。何時の間にかポケットに入っていたんでね」

「カードのナンバーをお知らせ下さい」

「ナンバーだって、そんなもの書いてあったかな。電話番号だけだったと思うけど……」

「もう一度お調べ下さい。裏面の右下にナンバーが打ってありますよ」

ポケットを探してカードを点検すると、いわゆる通り片隅にF 302と打たれている。

「ありました。F 302です。F 302。……」

「F 302ですね。そのままお待ち下さい」

受話器を耳にあてたまま、何のためのナンバーなのかと昼標喬二は推測した。F 302は恐らく六本木の地名か、さっきのレストランをあらわす記号で、近辺をパトロールする仲間に素早く通報しているのではあるまいか。

「お待たせいたしました。ナンバーF 302は、昼標喬二さんですね」

「それは、そうだけでも、どうして名前が必要なんですか。……お宅のシステムだって、まだ何もわかつちやいないんですよ」彼はしどろもどろの口調でいった。

「ハンブルグはメンバーの信用を中心にした堅実で有効なシステムです。どうぞご安心下さい。あなたがこのまま電話をお切りになっても、決してご迷惑をかけるようなことはありません。……もしもし、希望される時間をご指定下さい。場所は当方で案内いたします。もちろんキャンセルは自由です」

「しかし、まだお宅がどんなシステムなのか承知していないし、それをたずねようと思って電話したわけだから……時間をどうか、そういうことは考えていないのですよ」

「わかりました。ではこうしましょう。今晚八時、新宿ホテル・パドリオ一階のロビーに、お気持が向かれたらおいで下さい。ご都合がつかなければまたの日の連絡をお待ちします。F 302はつねにあなたのナンバーです。どうぞそのカードを紛失なさいませんように。ありがとうございました」

電話の切れた後、昼標喬二はしばらく受話器を持ちつづけていた。如何なる手立^{てだて}でF 302と自分の名前を結びつけたのか。応対の仕方や、やりとりの台詞^{せりふ}といい、新しい形式であることに相違ないが、これだけですむのかという漠然とした不安を、どうするよしもない。

昼標喬二はボックスを出ると、目的もなく交叉点の方へ歩いた。ハンブルグという組織に登録されているF 302。電話を掛けた位でまさか恐喝もあるまいというおびえのようなものが、すうっと脳裡を通る。足の向くまま右手に折れると、なだらかな坂下の店先にまた短い行列ができてゐる。

覗^{のぞ}いて見ると矢張り鮮魚を売っているのだ、鯖^{さば}。

「生きがよさそうだけど、何処^{どこ}のものですか」

行列の後尾について、彼は前方の若い主婦らしい女性にきく。